

# 現地を行く

主婦之友皇軍慰問特派員

吉屋信子

主婦之友特派寫真班撮影



# 戦禍の北支



主婦之友 昭和十七年三月

# 國産ピカ粉白粉

匂ひ許りてなくこれが良いのです

時代にふさはしい色調

理想的被覆力

そして定着力

それが粉白粉本来の目的です

カッピークリーム

強力渗透性栄養ウィタミン  
高貴薬キヤロテンヌの配合により  
生命素を補給し皮膚細胞を新  
生分裂せしめ老廢物を一掃する

最高規準基礎整肌料



○理想的調合度による定着力

○可及的に使用せられた植物性パウダーのもつホルモンの榮養効果

○優良な色素を以て化學的着色法を利用により色素電絶無

○神秘的なカッピーの麗香と近代日本的五色の色調

たぐらぬで、遂に残兵にも便衣隊にも目につくこと  
なした。  
「あゝ、此處が、あの悲しい口惜しい事件のあつたところ」と思  
その門さへ、この世ならぬ、さびしい姿に見えた。  
その門前には、日本兵が哨兵に立つてゐられる。  
その城門の柱に、白木綿の布に墨痕淋漓と記されて、掲げら  
字は、  
(日軍市民役罪掃除隊劣軍隊)  
(軍民一致建設明朗的通州)  
この二筋の白い掲げの旗が、北支原野の新しい陽を浴びて、  
なしく……旗がせまる。  
車を止めて、哨兵の前を通り、再び車で、守備隊を訪れる。  
途上に、人影なく、寂として静なき、死の街！  
私たちも、息を呑んだ。

## 第五信

嗚呼、通州！

北平に着きし翌日は、まさに八月廿九日。

この一ヶ月以前の七月廿九日午前二時の深夜、北平を距ること卅キ  
ロ(約八里)、北平郊外とも言つていい、通州城内にて、如何なる悲惨  
事が起りしか？ 日本同胞九千萬の、いつの日か忘るゝことの出来よ  
う、遺憾なきはまりなき痛恨事が、通州城内で、暴虐、蹂躪、悪鬼、殺  
鬼にも優る支那人保安隊の手で、わが同胞邦人の上に振舞はれた、  
その日だつた。

丁度一ヶ月目、最初の悲しき極みの、亡き居留民の命日に當る。  
偶然にも、その日、我等一行は大毎支局の本田氏一行に守られて、  
通州邦人殉難の地におもひいた。

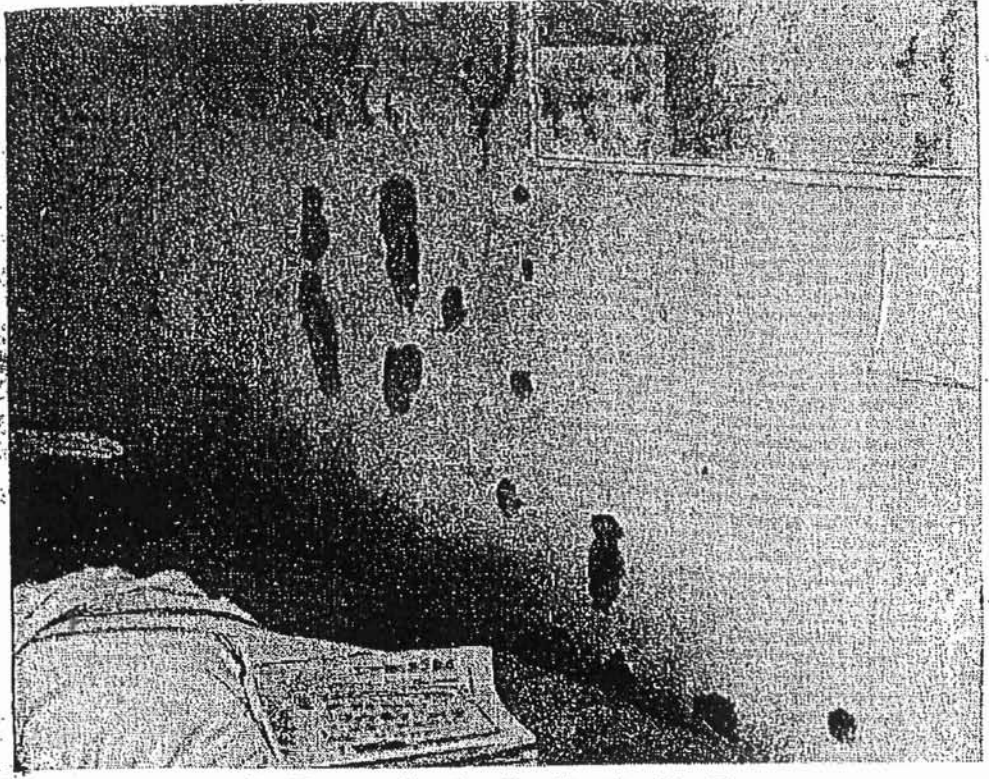
北平の朝陽門を、われら一行の分乗した二臺の自動車は、風と埃を  
舞いて走り出でた。

通州までの槐の並木の道路の兩側の寂しき高粱畑は、黄ろい埃を  
浴びて、カサ／＼と鳴る。その度に一寸不安な氣がした。

それは、暴虐な保安隊の惡鬼どもの殘兵が、まだその邊にうろつい  
て、時々支那民家まで掠奪をしてゐると聞かされ「必ず大丈夫とは、  
うけあへぬ」と、北平の武官室でもおどかされたからだつた。

だが、何事もなく、わづかに支那犬が自動車の前を、ノソ／＼歩い

と、終りの文字は、ほとんど、左さがりに流れてゐる。  
偶然として見る、その窓ぎは、硝子は新に入れられたが、  
めちや／＼に彈丸の痕がある。  
その部屋で、現在の廣部部長が私どもを迎へてくださつ



痕 弾 の 營 兵 隊 備 守 州 通

おだやかに静かな口調で語られる部隊長の、落ちついた頼もしい言葉が、此處まで来ると、私たちは、言ひやうのない氣持に打たれ、せめて、その三人の首を、邦人殉難者の火葬場の前に供へるのこそ、花よりも、お線香にもまさる、何よりの手向けであつたやうな氣さへした。

兵營内を廣部部隊長御自身で案内してくださつた。  
彈丸の穴だらけの壁は到るところ續いて、兵營の屋上に登ると、そこから通州の街が見渡せる。

屋上の南の端に、白い木標が立ち、(故陸軍歩兵大尉藤尾心一戦死の跡)と、記してある。一同拜む。

その、はるか向うに、十字架を屋根の先に戴いた教會堂が見える。それぞ、さつき廣部部隊長が仰しやつた、アメリカ人の教會。その中に、卑劣にも逃げ込んだ保安隊の殘黨があるのだ。アメリカの勢力範圍に逃げ込んだら、日本は手が出せまいとばかりに逃げ込んだのかと思ふと、ムテ／＼とする。青空に白き雲浮ぶ、その下の十字架を私は、ちつと睨んだ。

十字架―子供の頃、日曜學校の生徒の折

上 屋 隊 備 守



部隊長は、北平城廣安門で勇名を轟かした廣部部隊の隊長共一行のリーダー本田氏とは、その廣安門戰鬪當時からつたわけだつた。

廣部部隊長―この方も私のよく言ふ、謂ゆる威ありもの柔かな―背廣にお着更べになつたら大學教授にで武人で、きはめて、くだけて、優しく話してくださつた。いかにしても、この度の通州の出來事は、残念至極の痛恨は、いかにしても、草を分け石の根を起しても、彼等保探して、我々邦人の仇を討つてやりたいと思つてをりの事件後、北平からこちらの守備に參つて、この兵營の眠つた夜は、いかにしても、眠る事が出來ませんでしたの周囲で、どうぞ仇を討つてくださいと言ふ聲々―

された邦人の願ふ聲がいたしますやうで……

部隊長の聲は、しめやかに痛切だつた。  
「この廿一日に、邦人殉難者全部の亡骸を集めて、やつしました時、この、はるか向うのアメリカ人の基督教會逃げ込んでかくまつて貰つてをつたのでせう、怪しげな出て来て、その火葬を眺めてみました。ところが、それ奴で、殊にその一人は、兵を指揮して、邦人の居宅のあこつちへ押し入れと、指圖した奴でして、一人は邦人にたボーイで、それは、(あすこに日本人が隠れてゐる、こあると、教へた奴でした。それを捕へて、いろ／＼調べ逃れの嘘はつきますが、たうとう罪跡がわかりました」

から、この十字架を神聖な貴きものと思ひ續ける習慣。今日この北支那、通州の晩夏の空の下で、生れて初めいやあな氣持で眺めた。

あゝ、あの十字架は、去る一月前の、廿九日―無地上に行はれるのを、見てゐた十字架だ―

だが、思へば、木か鐵でつくった形ばかりの十字架に何を求め得よう——その日、屍と化せし百九十餘名の人々こそ、いかなる十字架を貰うて、この土に倒るゝ運命であつたのか！

それから副官山本大尉の御案内で特務機關の建物に到る。こゝは全員全滅の悲壯な場所、入つて左手の室の壁には弾丸の痕は烈しく、大尉はその床を指して、

「此處に、甲斐少佐が倒れたのです」

私たちは默禱を献げた。廿九日未明叛亂保安隊は、その數三千人、日本軍守備隊は、僅に五十名足らず、特別機關は十指に足らず、それが、よく力戦死闘して守り、特務機關の全員は、重要書類を死守して、五千發の弾丸を射ち盡し、遂に甲斐少佐は、白刃を抜いて入り来る敵を突き刺しつゝ力戦、遂に力盡き、無数の弾丸を受けて、無念にも倒れた、その個所なのだ。

倒るゝまで、自らも敵を突き刺し退けた少佐は、せめてもの武人の本望であつたらう。少佐の靈よ、安かれと、私達はうなだれて、更に奥に進むと、中庭の右手に、内部を焼き抜いて石の壁のみ残る小さい建物がある。六人の少年給仕が死守したといふ重要書類を納めた場所である。敵兵が屋根に投げあげたガソリンの罐のために、焼失し、重要書類は一葉も、敵兵の手に渡らずに済んだといふ。

「あれです、あの罐が敵の投げたガソリンの罐です」と山本大尉が指さるゝ處、焼け抜いた屋根の端に、赤ちやけ錆びた罐が斜にひつかゝつてゐる。その倉庫前の石壁の上は、二名の少年給仕の、手に短銃を持った亡骸が倒れてゐた處だといふ。倒るゝ時、母の名を呼んだであらうか——聞くもの、見るもの胸をえぐられる。

われらは、黙々として更に車を通州市街に走らせる。市街と言つても、掌中に納るやうな、小規模のちんまりした街だつた。

この小さい街の中一つが、三千の暴兵、惡鬼の跳梁に踏みじられて、この世ながらの地獄と化した巷なのだ。いつそ、もう少し広い大

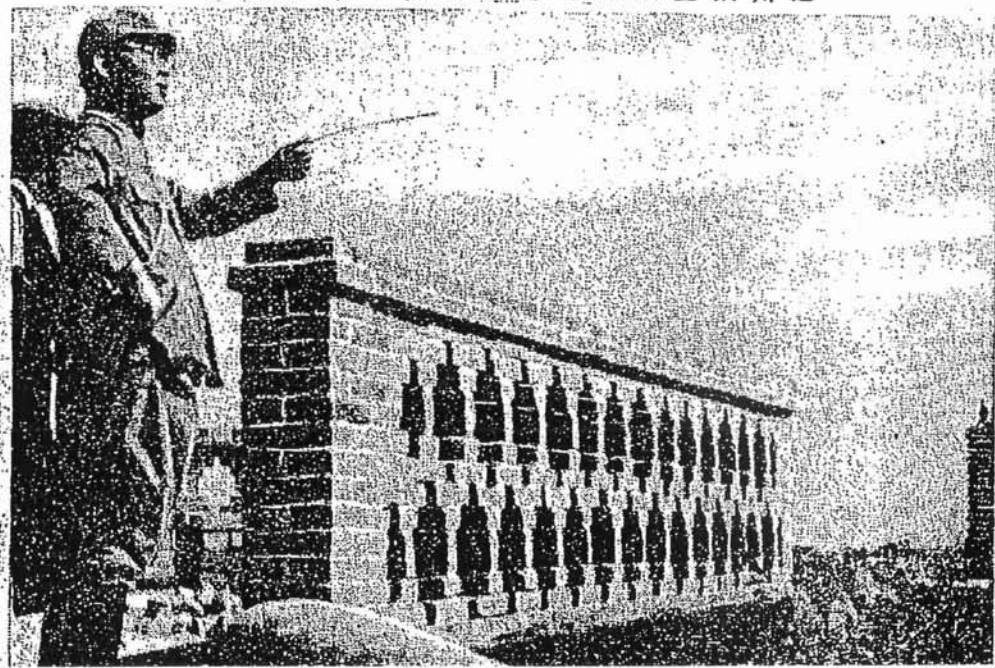


セイサンオネの樓水近ルテホキ無人

車は街はづれの城壁の傍まで走つが降りると、そこに、前庭を控へての二階建の大きな建物がある。正面に、青いネオンサインで、近水樓とる。邦人虐殺で、もつとも有名なこの悲しい日本宿に、今もなほ、そ

な街だつたら、逃れ隠れ得る餘地があつたやうな気がする。の兩側、どれもたいてい支那風の質素な古びた建物で、日本だつた跡は、釘付けにされてゐる。その間に、支那人の家が軒毎に彼等は日章旗を掲げてゐる。その旗が、たいていおで、不器用には出来てゐるが、日本の旗日の丸は、いざといぐつて掲げられる、清く淡白な含意多い旗じるしだと、今更に思つその日の丸を軒に懸、す彼等の中に自分の安全を計つて日の丸を掲げでなく、あの邦人遭難の日に、邦人幾人かを、助けかばひ、我家に隠し那服を着せて落ちのびさせた、真の魂を持つ人もゐるのだと思ふとなこんで、その支那の民屋の前を歩この街通り全體、今は僅かな支那かり、低い暗い軒のみ揃つて、さなンベイの廢墟を歩く心地した。

周大本山の役内案御てに上壁城州通





池 た し 棄 遺 を 體 死 慘

サインのみ、紫色に光る不可思議さ——われら、それを仰いで田ぞつとした。

銀座で見るカフェのネオンサインと同じものながら、此處、の沈黙の街で、那人虐殺後の廢屋の軒に仰いだ薄青きネオンサインの不気味な怪奇さよ。

今はすでに、此處にありし人々、あまたの影なく、生命なく染みし廢屋にたゞ残りにて光る、この薄青きネオンサイン。華かきネオンサインから、かゝる凄惨な感じを受けようとは、此處で初めて知つた。

入口の硝子戸は破れてゐるが、その奥の障子は、さほど破れい處を見ると、恐るべき闖入者達は、武器なき人々の無抵抗を大手を振つて悠々と流れ込んだのであらう。

すぐの右手の三疊の障子は、あとかたもなく、見透しだつた一行が立ち止つたので、私もそつと覗いた。——瞬間では私の視線に入つたのは、押入内から、柱と壁へかけての、黒ずしぶき、床板の點々たる血痕——疊はすでに、はがれてゐるのほそだけ血の跡がありとすれば、疊の上はどんなだつたか！

私は、いきなり、横手の廊下に逃げ出した。そして皆が廊下のを、一人で待つてゐた。

「あすこが、女中部屋でした」と、誰か教へてくれたので、再び身内がをのゝいた。あゝ、今の刹那見た血しぶきは、みな此中さん数人の血だつたのか！

私は思はず両手を合掌した。か弱い女性に、武器を持つて、る暴力、悪虐非道殘忍の行爲をほしきまにし、地獄の責を

「こゝに隠れてゐた投宿者が、こゝから、廢屋の衛兵の奴達ずりおろされたのです。そして銃殺場へ、縄でつながれて、漣かれたのです」

と、説明の言葉に、私は悲憤の涙を呑んで、恐ろしい天に上げて、言ふべき言葉もなかつた。



通 州 警 官 舍 掠 奪 の 跡



方をした、冀東政府保安隊よ、汝等人類の敵、地球上の男性中の最悪劣等卑劣、獸類に劣する彼等を、日支親善平和の通州の保安隊として、日本軍自ら彼等に軍隊教練を指導して、一人前の兵士に仕立て上げてやつたのだとは——さればこそ、守備隊も通州居留民も、彼等を信頼して、北支事變後も、此處ばかりはと、平和を信じて、動搖せず、その日まで、各自業に安んじてゐた故にこそ、この無類の災禍を受けたのだつた。

あゝ、聲のみ大にして内容は空しく偏頗の日支親善を巧に装ふ、彼等半獸人よりも、むしろ、抗日思想に燃え立つて、生命を棄て、日本兵と戰場に争ふ蔣介石の中央軍の方が、どんなに男らしく、眞人間であるか判らないと、その時、おなかの底から私共は思つた。

その建物に、一行は更にあがらうとする。私は足が進まなかつたが、一人で階下に残るのは、しんかんとした廣い建物の中、とても怖くて、しかも、階下には、あの女中部屋があるのだ。たまらないから、兵隊さんに、頼みつくやうにして、階段を登る。

でも幸ひ、まつたく幸ひにも、階上には血の痕もなく、たゞ天井板に大きな穴が開いてゐた。ところへ、下から銃剣で突き上げた痕がある。

死の家近水樓を逃るゝ如く、私たちは出て、城壁の上に登つた。そこから、近水樓の裏手は大きな蓮池で、青い廣い葉がいつばい水に浮び、僅に咲き残りの花の大輪も、かなしく仄に見える。

「あゝ、何故女中さん達、あの池の中に、いつそ飛び込んでしまはなかつたかしら、そしたら、蓮の葉の下に隠れて助かつたかも知れない」

皆言ひ合つて、暗然として、池を覆ふ荷葉を見渡した。

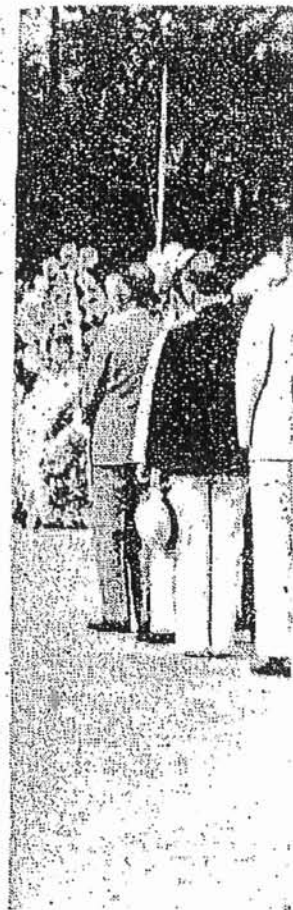
あゝ、蓮の花、それは佛教では、阿彌陀如來の淨土に咲く花だ。その花が淨土ならぬ血汐の地獄の家の裏手に咲かうとは……

その城壁面には、白い漆喰で、(與衆共悉)といふ文字があり、その脇に殷汝耕と添へてある。殷汝耕さん、何が衆と共に樂しみですか、冀東政府長官のあなたの衛兵は、何を行つたか。

その文字の白々しさ、ばからしさ。まこと支那の國は、至る處、文字の遊戲で終つてゐる。

私たちは、その壁上に、近水樓で客の眼の慰みに作つたらしい花壇に咲く、夏草

北平大使館テニスコートにて行はれし通州殉難者慰靈祭に  
主婦之友社より花輪を贈り、一行参列 (八月廿九日午後三時)



通州警官舍前の中庭の跡 (主婦之友がある)

の花、百日草のたぐひを手折つて束ね、それから導かれた花、百日草のたぐひを手折つて束ね、それから導かれたつた北門際の銃殺場、凝んだ水たまりの前の、黄ろく陰鬱な土の上に献げて拜んだ。

その水たまりの向うの城壁前の凹味に、あまたの邦がれて立たされ、水たまりのこつちから、保安隊が銃て、一人々々、三四十人を倒したのだと云ふ。

私は、これ以上、もう神經がくたくになつて、何れない氣がした。

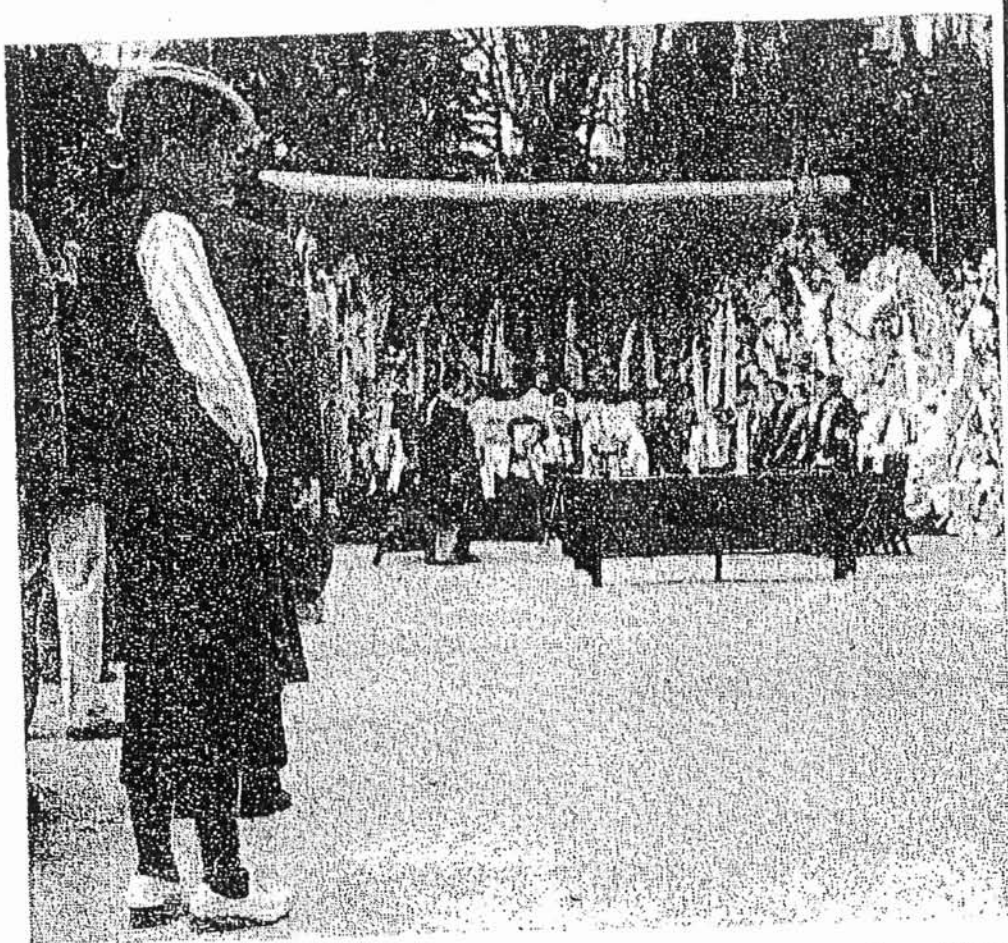
私共が手折りし花を献げて拜む足許に、黒髪の良いあちこち亂れ落ちて、土にまぶれてゐる……。子供の單衣が、土に埋もれかけてゐる。惨、また惨！私どもは、せめて一束の花をそこに供へ、双手を合眼をつぶり、

「どうぞ、お氣の毒な皆様、國家のための人柱となつて、諦めてください、今私たち日本人は、こゝに於いて拜んでゐます」

と、邦人悲憤の最期の銃殺場に向つて、拜んだ。眞晝の陽は、重苦しく、その水溜りの上に、さびてゐた。私たちは、皆泣いた。たゞ泣いた。泣くよ、なんの手向けの言葉もあらう。

せめては、その邦人の血汐浸みし泥土の上に、わを傳はり落ちる涙の露こそ、いとせめて、悲しき木同胞の手向けの水ぞ。受けさせ給へ。

私たちは、最後に、領事館警察署全滅の跡へ行つ



は市街の中央らしく、近くは支那人の民屋や商店がある。警察署の中は焼けてゐた。その中に、真夜中に、早くも制服を着てビストルを握つて守つた警官が全滅したのだつた。

その奥は、中庭を圍んで、三方に、手狭な支那家屋が一房づゝ仕切つて、土間と畳敷とで、日本人の棲めるやうになつてゐる。なんといふ、つましい質素な警官や舎だつたらう……。私たちは、もうそれだけでも悲しくなつた。その左手の一軒の内部は、あらゆる家財が、掠奪後の散亂状態で、中に、血の黒く残つた白布のまゝの子供のお蒲團があつた。

もう、私たちの神経も、血痕にだけは、悲しくも馴れてしまつたほどだ。

次の一房の中を覗くと、あゝ、その一隅のアンペラを敷いた壁の下に、實にたまらない、血の波のほとばしつたやうな痕が、あり／＼と残つて、家具の残骸が散り敷いてゐる。

私たちは、黙禱して内部に入る。地上に散つた様々の紙片の中に、二三葉の葉書、封書あり。いづれも、表に、通州日本領事館警察分署内、日野誠直郎と記してある。この官舎は、日野氏夫妻の住宅だつたのだ。夫妻、幼兒共に今は亡し。噫！

その奥の壁には、七月廿八日のカレンダーが28の字を出したまゝ、恐らく永遠に、めくられることなく、さびしくかゝつてゐる。

悲しさに堪へず、倉皇として立ち去らうとして、ふと足許に落ちてゐる、女學校用地理教科書を見出した。その表紙に、四年六組三好智恵子と、上手な字でしてゐる。

「これは、日野さんの奥さんの舊姓でせう」

と、御案内の土官が仰しやつた。

私が手に取つて開けば、東洋地理——あゝ、良人と共に、この北支通州に來らるゝに際し、支那の地理を勉強しよう、必要のこともあらうと、女學校時代の東洋地理の教科書を、赴任の荷物に入れて來られたのだ。なんといふ可憐な女性らしさ……

その前の血汐の染みしアンペラの床の壁の上には、あゝ、これはまたなんと、私も見覚えてゐる昭和十二年「主婦之友」新年號の附録についた色紙、堂木印象畫伯筆の薄紅梅の色紙が、一葉貼つてあつた。私は、たゞ呆然として、それを見詰めて涙も潤れ果てる思ひだつた。その時、暗然として、土官の一人が仰しやつた。

「こゝに家計簿が散つてゐましてね、二十八日に買つた野菜の値段も書いてありました」と仰しやつた。あゝ、何故この上悲しい話を聞くのだらう。

良人の赴任地に東洋地理の教科書を携へ、手狭な官舎の中をつゝましく飾ると、婦人雜誌の附録を貼り、家計簿を丹念にするし、つましく、手がたい主婦として、善き妻として、優しき母として、こゝに棲みし、まだ年若き、可憐な人妻が、なんの罪ありて、惡虐の刃を受けて果てねば、ならなかつたの

東京歸省の吉屋女史 (九月三日)



日野氏の家庭の一と行 (八月廿日 平北にて)



か？ 天に哭し地に哭して、神も憐れ憐れみたまつた。私は、その東洋地理の教科書の埃を拂つて、つましんでアンペラの前に置いて、合掌した。出づれば、その隣家の軒先の、たいきの上に、子供の小ゴム靴が散つてゐる——もう、たまらなかつた。

サツクは何處の品を選ぶか？

フタバの商サツク

製造家より直接消費者へ

製造家―卸賣―小賣商―消費者にあつ

現代産兒限制器具番一安全なもの？

サツク以外なし

斯界諸博士の認ためる事なり

1 使用に簡單：二三秒  
2 價格が安い：家庭用などは公爲器  
3 性感を減ぜず：急速なる技術の進歩  
4 新し：即座に覚えぬ、店員の  
タナザラシにあらざる

弊商會は創立してより數十年、主婦に廣告發表をいたしましてからも、年に及び、充分の信用を保つて現在に近頃、いかにはしい類似品がましたか、特に御注意申上げます。

製品表

目立たぬ個人名義にて密着します。安撫に相類品は却つて非常に危險です。フタバ商會のサツクは全部保証付です。絕對安全。

特別製 佛國製 フイツシユスギン 壹個一圓 參個三圓七角

特賣

御家庭用(保證付)徳用サツク 普通 五拾個入 金壹圓 特別 五拾個入 金貳圓

本舖 東京 銀座 西大久保一丁目五十四番 取次 東京 神田 區 錦町 一八〇番 主婦之友社